

## 肝心なことは目には見えない（1）

昨年発生した福島第一原発事故は、「原発は安全」という国の説明が、確たる根拠を持たないものであったことを如実に示す結果となりました。

国民は国の説明を信じてきたといえれば聞こえは良いのですが、実は、原発とちゃんと向き合ってこなかったといった方が良いでしょう。一部の方は、原発の危険性を指摘して来ましたが、多くの国民は、内包している危険性への理解が足りなかったというより、原発のことは何も見えていなかったというべきかも知れません。まさに「肝心なことは目には見えない」ということです。この言葉は皆さんもご案内の通り、サンテグジュペリの小説「星の王子様」に出てくる一節ですが、頑丈そうな建物を見せられ、「何重にも安全対策を講じています」といわれてその気になり、事故が起こると明日にもこの世の終わりが来るような大騒ぎをする。原発の問題については、今こそしっかりとした、冷静な議論をしなければなりません。現状は逆で、目の前の現象に囚われ右往左往し「肝心なことが見えている」ようには見えません。

「肝心なことは目には見えない」という、しばしば人口に膾炙するこの言葉について、サンテグジュペリは何を伝えたかったのでしょうか。

ここで、「星の王子さま（池澤夏樹訳）」の物語を少し辿ってみることにしましょう。

星の王子様は砂や岩や雪の中を随分歩くと、やがてバラが咲き乱れる庭園に着きます。そこで王子様が見たバラたちは、以前自分が大切にしていた「あの花」とよく似ています。彼はとても悲しい気持ちになります。何故なら、彼の「あの花」は宇宙に一本しかない種類の花だと思っていたからです。しかし、ここにはそれと同じ花が5000本は咲いているではありませんか。彼はひどくがっかりして、涙が出ます。

そんな時でした、キツネが彼の前に現れます。キツネは王子様に自分を飼い

慣らしてくれるよう頼みます。「飼い慣らす、ってどういう意味？」と王子様は尋ねます。キツネは「それは、絆を作る、ってことさ」と答えます。

その意味は「きみにとっておれは10万匹のよく似たキツネのうちの1匹でしかない。でも、きみがおれを飼い慣らしたら、おれときみは互いになくはない仲になる」。王子様は少し分かったような気がしますが、でも、以前「あの花」は自分が飼い慣らしたはずなのに、バラ園の花たちと同じにしか見えなかったなあと疑問に思います。

王子様がキツネと分かれて出発しようとする、キツネは「もう1度あの庭園のバラたちを見てみな。きみのバラは世界に一つしかないってことがわかるはずだ。」そして、「戻ってきたらお別れに1つ秘密をあげるから。」と伝えます。

王子様が改めてバラ園に行ってみると、王子様は、バラ園のバラは、自分の知っている「あの花」とは違うことに気付きます。彼はバラたちに「通りすがりの人たちは、ぼくのあのバラを見て、君たちと同じだと考えるだろう。でも、あれはきみたちぜんぶ合わせたよりも大事だ。なぜって、ぼくが水をやったのは他ならぬあの花だから。ぼくがガラスの鉢をかぶせてやったのはあの花だから。」(塾頭 吉田 洋一)